

また、最近は「おひとり様」というスタンスで、三十代、四十代にも「一人で生きて、一人で死ぬ」ことがあたかもブームのように語られている。その是非を問う必要はないが、それにどれだけの人が納得しているのだろうか。

「いい死に方をするには、いい生き方をしていくかどうか」

そんなことがよく言われているが、まさに高齢社会、そして個室化した住環境、デジタルな人間関係に慣れた日本人にとって「いい生き方」とはなにかを孤独死は物語っているかのように思われる。

同居で亡くなった人の部屋を片付ける仕事を描いた映画「アントキノイノチ」のモデルになり、延べ一〇〇〇件以上に及ぶ「孤独死と思われる部屋の後片付け」をしてきた遺品整理業者「キーパーズ」の吉田太一社長も「孤独死ゼロは無理」と言う。「生きる力をなくした人に生きろ、というのは無理な話」(吉田社長)

だが、吉田社長が書いた著書などを讀んだ若い二十代から「私もぎつと孤独死しますよ」という声を多く聞くことには憂いを感じるそうだ。「だから、災害後の対策、というところで特殊化するのではなく、この先の日本に対する警告として受け止めるほうがいい」(吉田社長)